学校事例 3

生活に即した「リアルな問い」で言語活動を行い、定期考査で評価

佐賀県 小城市立三日月中学校

2011年度、佐賀県の教育課程研究推進校の指定を受け、「リアルな問い」の開発を中心とする言語活動に取り組んできた小城市立三日月中学校。指定終了後も、全校を挙げて、評価の工夫やノウハウの継承などに取り組む。どのような課題認識の下に取り組みを深化させているのか、追跡取材した。

◉課題意識

生徒の思考力、判断力、表現力をどのように評価するか

小城市立三日月中学校では、2011年度から2年間、佐賀県の教育課程研究推進校の指定を受けて「学びをひらく授業の創造」の研究に取り組んできた。教室の中だけで授業を完結させるのではなく、授業後もそのテーマや社会の課題について考え続ける生徒を育てることを目的とした研究だ。その内容と成果は、本誌13年度Vol.1の特集で紹介した。

取り組みの柱の1つは、授業における「リアルな問い」の設定だ。全教科で単元の中に実社会や生活に即した問い、アカデミックな問いを用意し、言語活動を通して生徒が自ら考え自分なりの答えを模索する。また、授業で言語活動を円滑に行う雰囲気をつくるため、朝の会で「リレーションタイム」を設定。生徒がペアやグループで対話やスピーチを行い、互いを認め合う気持ちを育むことで、意見を述べやすい雰囲気にしていく。

一連の取り組みを通して、生徒の学習への意欲が高まり、生徒同士が認め合う雰囲気が生まれるなど多くの成果を得た。指定終了後の課題は、「リアルな問い」を生徒にとってより意義のある内容にすること、更に生徒の思考力・判断力・表現力を測る評価方法の開発、教師が意欲的に取り組みを継続することだった。それらの課題を踏まえ、同校がどのように研究を深化させているのかを見ていく。

◉「リアルな問い」の設定

一次関数を用いた紅葉の予測など生活に根ざした課題を設定

「リアルな問い」の設定は、引き続き同校の研究の柱だ。13年度も「聖徳太子の理想が実現したのはいつか」「最も賢い幕政改革者は誰か」（社会科）、「平方根は実生活にどの

School Data

◎1947（昭和22）年開校。教育目標は「社会を生き抜く知恵と力を身につけた心豊かな生徒の育成」。言語活動と共に、特別支援教育にも力を入れ、2014年度からは文部科学省指定の研究事業を推進する予定。

校長◎平川富久先生

生徒数◎ 465人　学級数◎15学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒845-0021　佐賀県小城市三日月町長神田1650

TEL◎ 0952-73-2016

URL◎ http://www3.saga-ed.jp/school/edq11051/

公開研究会◎ 未定

＊プロフィールは2014年3月時点のものです

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

ように役立つか」（数学科）、「１００年後の自動車はどうなっているだろうか」（技術・家庭科）といった問いを授業で投げ掛けた。

数学では、１年生「資料の活用」の単元で「ヒット商品を世に送り出そう」という課題に取り組んだ。４人１グループを１つの会社に見立て、新しい２種類の乾電池のどちらを商品化するか、電池の稼働時間を示す複数の資料を使って考える。生徒は授業後のアンケートで、「いろいろな考えが聞けて楽しかった」「違う意見でも互いに納得し合うことが出来た」などのコメントを寄せた。同じ課題でも人によって考え方はさまざまであることが分かり、刺激になったようだ。

２年生では、一次関数を用いて、佐賀県の紅葉の見頃を予測するグループ活動を行った（**図１**）。過去５年間の９月の平均気温、紅葉の最盛期のデータに基づいて計算し、「自分たちの予測が当たるかどうか、楽しみにしよう」という原正和先生の言葉で授業を終えた。

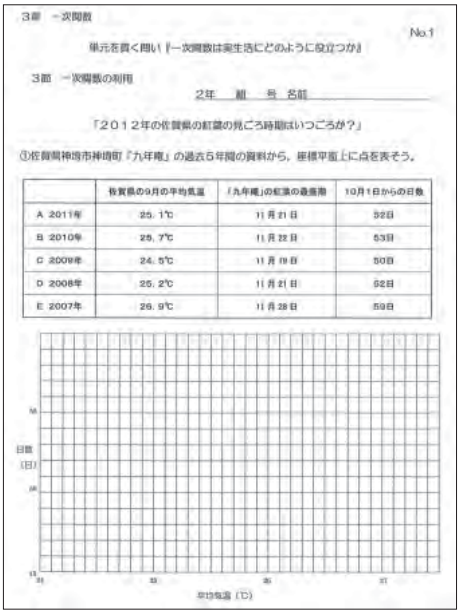
「生徒は、一次関数を使って紅葉の予測が出来ることに驚いていました。数学が将来どのように役に立つのか分からないという生徒が少なからずいるので、問いは、生活の中で数学がどのように役立っているのかを生徒が感じられる内容にしています」（原先生）

問いの中身と共に、ワークシートも進化している。理科では、ワークシートを中心に進める授業形態をとっており、授業改善もシートを中心に行っている（**図２**）。

研究主任の真子（まなご）靖弘先生は、「理科のシートは構造化されていて、見ただけで授業の流れが把握できるようになっています。生徒にとっても書き込みやすく、見通しを持って授業に臨むことが出来ます」と話す。

また、社会科では、集団討論を行う際に、立論内容が資料の引用にとどまる生徒が多かったことから、討論前に記入する立論シートを工夫した。以前は結論に対する理由付けの前に引用資料を記入する形式になっていたものを、結論→理由付け→引用資料の順に改

図１　数学のワークシート



「一次関数は実生活にどのように役立つか」の課題として紅葉の見頃を予測する問いを出した。ワークシートは２枚で、１枚目は過去５年間のデータから座標平面上に点を表し、２枚目で一次関数のグラフから関数の式を求め、見頃を予測した

＊同校の資料をそのまま掲載

図２　理科のワークシート

２年生理科の観察・実験用ワークシート。１時間の授業で何をするのかが１枚で分かり、生徒は見通しを持って授業に取り組める。また、どの点を評価するのかも明記し、生徒が何に留意してワークシートを書けばよいのかも分かるようにしている

＊同校の資料をそのまま掲載

小城市立三日月中学校校長
平川富久　ひらかわ・とみひさ
「『生きる力』をバランスよく身に付けた生徒の育成に努めたい」

小城市立三日月中学校
真子靖弘　まなご・やすひろ
研究主任。社会科担当。「何事も創造的に考えることを、自分自身にも生徒にも求めていきたい」

小城市立三日月中学校
原　正和　はら・まさかず
研究副主任。授業づくり研究部会長。数学科担当。「問題を解決しようとする意欲を引き出す授業をしていきたい」

めた。更に、自分の言葉で書けていない生徒は書き直すように指導し、模範となる生徒のワークシートを電子黒板で映して共有するようにしたところ、書き方が分かったためか、自分の言葉で書く生徒が増えたという。

◉言語活動の評価方法

定期考査を工夫し考える力、表現力を問う

定期考査では、思考力・判断力・表現力を問う出題をしている。

社会科では、集団討論をメインに言語活動を取り入れているが、定期考査では授業で扱っていない資料を用いて思考力や判断力を測る。1年生の学年末試験では、アメリカの銃乱射事件とコーヒーチェーン店の銃規制方針の新聞記事と、銃を持ってカフェに入店しようとする客と店員との会話文を提示し、資料を活用しながら店員がどのように客を説得したのかを考えさせた（**図3**）。試験前、生徒に出題形式は伝えるが、資料や設問は試験本番が初見となる。自分なりに資料をどう読み解くか、日頃の言語活動の成果が試される。

採点では評価基準に柔軟性を持たせることを意識していると、真子先生は説明する。生徒が書いた解答を一通り読み、想定外の考え方や表現があれば、それを踏まえて評価基準を修正し、教科内で目線合わせをした上で採点に取り掛かる。

「このような問題は採点に時間が掛かりますが、授業で集団討論をしているのに、試験では知識・理解しか問わないというのでは、生徒は集団討論で学ぶ必要性を感じにくくなってしまいます。定期考査でも出題することは重要だと考えています」（真子先生）

数学科では、思考の過程が分かる問題を最低1問は出題する。採点では、根拠を示し順序立てて書いているかを重視。社会科と同様、採点の公平性を担保するために、模範解答を用意しておき、それから外れる解答があれば随時基準を修正しながら採点を行う。

図3　社会科　1年生の学年末試験

思考・判断・表現 26点

6　太郎さんは，アメリカ合衆国について調べ学習をしている時，「2つの新聞記事」と「スターバックスの店員と客の会話文」を見つけ出した。新聞記事と会話文を読み，各問いに答えなさい。（3点×2＝6点）

＜新聞記事1＞　米コネティカット州の学校で銃乱射

アメリカ東部コネティカット州ニュータウンの小学校で14日午前，銃乱射事件があり，捜査当局関係者によると20人の子供と犯人を含め計27人が死亡した。

時事ドットコム　2012.12.15.

＜新聞記事2＞　米スターバックス「銃持ち込まないで」，7000店対象

アメリカ合衆国大手コーヒーチェーンのスターバックスは18日までに，店内に銃を持ち込まないよう客に要請する方針を発表した。同社の直営店は全米に約7千店。銃規制反対派からは「二度とスターバックスには行かない」といった反発も出ている。

日本経済新聞（共同通信配信）　2013.9.19.

＜会話文＞　アメリカのあるスターバックス店での会話

店員　：　お客様へお願いです。店内に銃があると多くのお客様が不安感を持たれると思いますので，次回からご来店される際は，ご自分の銃は自宅に置いて来てください。

客　：　えっ！　銃をもってスターバックスに入店できないの？

店員　：　いえいえ。あくまでもこれはお願いでございまして，銃をもった方はお店に入れないということではありません。

客　：　アメリカ人が銃をもつことは憲法で保障されている権利ということは知っていますよね？

アメリカ合衆国憲法修正第2条

「よく統制された民兵は，自由な国の安全にとって必要であり，国民が武器を所有し携帯する権利は侵されてはならない。」

※「民兵」とは，一般市民が兵になること

店員　：　a はい，もちろん知っております。ですから，あくまでも「お願い」であり，「禁止」ではありません。最終的にはお客様の判断におまかせ致しております。

客　：　憲法で国民の権利として認めていることなんだから，「銃をもって入店しないでほしい」というお願いをすること自体がおかしいとは思わないのかい？　それに，b 殺人を犯すのは銃を使う人間であって，銃そのものが勝手に人を殺していたのではないのですよ。

店員　：　A

1　会話文中の下線部 a の店員の発言は，本当に，アメリカ合衆国憲法修正第2条に違反しないのか。回答欄のあなたの考えにあてはまる方を○で囲み，そのように考える理由を書きなさい。

2　会話文中の下線部 b の客の意見に対して，店員はどのようにお客を説得したと考えられますか。上の資料（新聞記事や会話文）に触れながら，A にあてはまる店員の発言を考え，書きなさい。

1年生社会科の学年末試験で出題した例。2つの新聞記事と会話文を読み、客を説得させるための会話を答えるという内容だ　＊同校の資料を一部編集して掲載

また、説明問題では、正誤だけが評価基準ではなく、第三者が見て理解できる客観的な説明になっているかをチェックする。原先生は次のように説明する。

「さまざまな解き方がある場合、きちんと説明できていれば、どのようなアプローチでも加点対象としています。授業では複数の解き方と、それを用いる場合のメリットとデメリットを教えていますが、どれを使うかは生徒の判断次第です。定期考査では、生徒がさまざまな解法を考えられるような問題を出しています」

◉ノウハウの共有、継承

年1回の全体研修会で教科・学年を超えて実践を共有

教師の意識の共有、ノウハウの継承はどのように行われているのだろうか。同校では13年度に多くの教師が異動となったため、2年

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

間研究に携わってきた教師と新しく赴任した教師の間で、いかにノウハウの共有や目線合わせを行うかが、大きな課題となった。

同校にはその解決策となる、学年・教科を超えてノウハウを共有する取り組みがいくつかある。1つめは、年3回の校内授業研究会だ。1回につき2教科が研究授業を行い、教師全員が参観して意見を述べ合う。13年度は国語、社会、理科、音楽、技術、家庭の6教科で実施された。

2つめは全体研修会である。授業で活用したワークシートや問題を持ち寄り、教科・学年混成のグループに分かれて共有する。12年度は12月に実施したが、「もっと早く知りたかった」「実践に生かせるアイデアがたくさんあった」といった意見が多数寄せられたため、13年度は8月に行った。

「教科を超えた研修は実践に役立たなければ、先生方の意識は高まりません。具体的な成果物を持ち寄って話し合うことで、議論が深まり、授業改善にもつながると考えています」（真子先生）

また、教科ごとに、スーパーバイザーとして研究協力を依頼している教育センターや教育事務所の指導主事などに、研究指定終了後も協力を継続してもらっている。13年度は、ほとんどの教科で同じスーパーバイザーに依頼できたため、新しく赴任した教師も取り組みを引き継ぐことが出来た。今後も教師の異動があるため、ノウハウの共有と継承は引き続き重要な課題だ。

◉成果と課題

自分で考え、意見を持つ大切さを入試の面からも説明したい

言語活動は準備や実践に時間が掛かり、導入をためらう教師は少なくない。その点について、原先生は次のように指摘する。

「言語活動は、時間が掛かるとは思いません。実際、今年の3年生は1月頃には教科書が終わり、入試に向けた問題演習や過去問対策に取り組むことが出来ました。高校入試では、説明や証明など言語能力を評価する問題も出るため、生徒も言語活動に意欲的に取り組めていると思います」

社会科は一時、記述問題や資料を読み取る力を問う出題が増えたが、近年は記述問題が減る傾向にあるという。「授業が入試にもつながっていることを、生徒に実感してもらいたいと思っています。自分で考え意見を持つ大切さを、入試の面からも説明できれば、授業に向かう生徒の意欲は更に高まると思います」と真子先生は期待を述べる。

研究指定の終了から1年が経過し、教師の意欲の継続、ノウハウの共有はどの程度進んだのだろうか。教師の自己評価は厳しい。13年度のアンケートによると、「学びをひらく授業づくりを行うことが出来たか」という問いに対して「とても」「まあまあ」と回答した教師は2割程だった。「全ての単元で出来ていないという意味で、厳しい評価をされている教科もあるのかもしれません」と真子先生は語る。事実、「思考・判断・表現力を育む言語活動を意識して授業実践できたか」という項目では、ほとんどの教師が「出来ている」と回答した。教師の自己評価の低さは、取り組みに対する真剣さ、自分の指導に対する厳しさの裏返しなのかもしれない。

14年度、同校は「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業」の指定を受ける。「今後は特別支援教育の視点を教科の授業に生かしていく工夫が、学校全体の課題になります」と真子先生は言う。

もう1つの課題は、リアルな問いの設定、考えさせるワークシートの開発など、引き続き授業改善を重ねることだ。平川富久校長は、いかに授業を変えられるかがポイントになると話す。

「生徒が活動する時間を十分確保するために、ICTも活用しながら、指導をより工夫していく必要があるでしょう。また、そうして生徒に付いた力が学力にどう反映されているのか、成果を測る方法の研究を深めることも課題です。生徒に身に付けさせなければならない学力は何かを、教師一人ひとりが自覚し、取り組みを更に深化していきたいと思います」